

## 2022年度 大阪公立大学個別学力検査(一般選抜 後期日程 ) 小論文 文学部 「解答例」

### 第1問

構築主義とは、文化人類学において、文化を考える場合の根幹をなす視座のひとつで、個々の文化の特質を固有のもののみを本質主義に対し検証を求める立場である。ある文化の特質を語る言説に対し、どこまで根拠があるのか、地域・階層・性・世代差を越えて共通するのか、誰が何のために主張しているのかなど、批判的な吟味が必要であるという学術的な姿勢といえる。また、これを突き詰めれば、ある文化の特性とされるものも、すべて比較的多い(あるいは少ない)といった相対的な捉え方となるが、だからといって文化の特徴を語ることはできないとのラディカルな相対主義とも異なる。十分な比較により一定の文化的特質を抽出することはできる。

### 第2問

「文化とは何か」という問いに対し、タイラーは「さまざまな文化的諸要素からなる全体」とする。しかし、構築主義の立場に立てば、「文化的諸要素」とは何かを問わねばならない。ところが、この「文化的諸要素」とは何か、文化を構成する要素は何であるかという問いは、「文化とは何か」という問いと実は同じことである。ゆえに、「文化とは何か」という問いは、トートロジーに陥るしかないのである。

### 第3問

男女の性差に関する境界線を取り上げる。今日の性的少数者を認めていこうとする動向も、人の生物学的性差を決定的な違いであるとしてきた境界線が、必ずしもそうではないという理解が進んだことによる、新たな現実の事例といえる。また、男女の社会的性差についての境界線についてもそうである。男性だから、女性だからということで、生き方に制約があってはならないが、長らく、男性は外で働き、女性は家にいて家庭を守るといった、社会的性差いわゆるジェンダーが厳然として存在してきたし、いまでも根強く残る。しかし現在では、これまで当然のように受け入れられてきたことが、そうではなくなっている。職業の自由な選択、平等な雇用や収入差の是正、出産や育児休暇といった子育てへの男性の参画、食事の用意をはじめとする家事への男女の共同参画が謳われている。これまでの社会的性差への疑問とその解決のための取り組みにより、意識は変わりつつあり、主婦に対して主夫が現れたり、男性の育児休暇の取得や家事への参画も増えている。これも、性差についての境界線が見直され、それを変更することにより、新たな現実が生まれつつある事例になるだろう。